

異常な狂騒、熱狂ぶりで、ヴェルディはこの愛国的オペラ2曲で聴衆が何を求めているのか？はっきりと分かって来た。しかし、これまでの作品の内にはリソルジメント運動とは関係ない作品も多々あるが、聴衆がヴェルディ＝イタリア独立運動の同志と、決め付けた。

ヴェルディは政治、宗教についてはごく普通の人であったが、家族の死、そして国家統一リソルジメント運動を聴衆と共に、政治にも関与してゆく。又、カトリック教会に対し疑問を呈する。家族全員の死により、カトリック規範に基づく社会の風習についてゆけなくなり、神など信じられない！！それ以後の作品では、カトリック教会を意識した作品が多くなってくる。それらの中でも「運命の力」「ドン・カルロ」「オテッロ」等は堂々とカトリック教会を批判、揶揄している。

*政治に関与・・国会議員になる

ここまで的作品により、聴衆（民衆）はヴェルディに対して念願の具現＜イタリア魂 Italianità＞を見て歓喜する。また後に、サルデーニャ王国カミッロ・ベンソ・カヴァール(1810/08～1861/06)首相から国民の代表として国会議員になるよう要請された。目的は人民をヴェルディ・オペラにより「愛国心」を高揚させることであった。

ヴェルディは音楽を通して政治的な背景を揺るがすことができることを知った。そして国家統一運動において最も有名な人物になったこともある。明らかに革命的な姿勢を反映したオペラを次々書いて、耳目を集めただけである。

*宗教について

先述の通り、カトリック教会、キリスト教に対して疑問を呈した。神との合一を求める。農業＝自然との共生。自然との合一を求めた。

ヴェルディは教会へ行くのが嫌だった為、サンタ・ア・ガータの屋敷に個人の礼拝堂を設けている。特別に必要があれば牧師を呼び執り行った。

後に、妻ジュゼッピーナの話によると、「この礼拝堂で敬虔なる祈りを捧げている姿を見たことがない。」と言っている。

*財を成して

国家統一リソルジメント運動と共に作曲された愛国的作品がバカ当たりした結果、1848年サンタ・ア・ガータに農地33万坪を暫時買い増し、住宅の増改築をし、自由を謳歌するため、日常生活の起点となし、作曲活動、農業をも営んだ。また、ブッセートに邸宅を購入した。オルランディ邸である。現在は「ヴェルディ博物館」になっている。以上がリソルジメント運動と共に作曲をした頃の総合的成果である。

*ヴェルディの人格形成がほぼ出来上がる。短気、頑固、傲慢と小心、気難しい闘志、人の関係を極力持たない等オープンではない。対人関係に於いては気難しく、多くを語らない。秘めているからこそ、人を引き付けるである。



*カミッロ・ベンソ・カヴァール (Camillo Benso Cavour) 政治家、

トリノの貴族(伯爵)で第二子として生まれる。イギリスへ留学。立憲君主制と産業革命の成果を目の当たりに接し、帰国後1847年「リソルジメント」紙を創刊し立憲主義を提唱。'48年政治家としてキャリアを積み始めた。その後、英国での見聞をもとに経済の知識と弁舌を生かし王国の大